

ファイフステル・サーガ

再臨の魔王と聖女の傭兵団

師走トオル



ファンタジア文庫

2713

C O N T E N T S

序 章 《魔王殺し》のエルフ ……	005
第一章 《狂囓の団》 ……	016
第二章 魔物の脅威 ……	074
第三章 カレルとセシリア 前編 ……	099
第四章 カレルとセシリア 後編 ……	166
第五章 妾腹の王子 ……	215
第六章 王家の兄妹 ……	250
第七章 三〇〇対一万 ……	289
第八章 勝者の帰還 ……	350
新 章 草原の灰エルフ ……	358
あとがき ……	362

ファイフステル サーガ

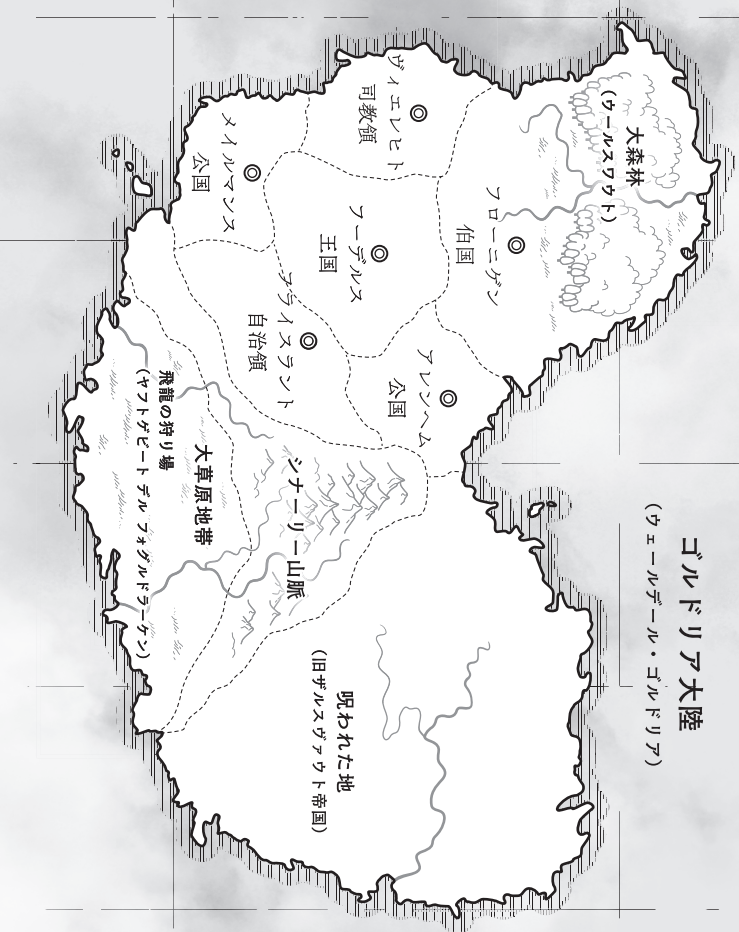
Resurrection De Verwoester
Heilige vrouw Bulderbrigade

Vijfster
SAGA

再臨の魔王と聖女の傭兵団

これより二年の後、古の魔王再臨し、人類は滅ぶ。
逃れる手段はただ一つ。
玉座の下に全ての力を結集し、来たるべき災厄に備えよ

口絵・本文イラスト 有坂あこ



ゴルドリア大陸
(ウエールゲール・ゴルドリア)

序章

《魔王殺し》のエルフ

そのエルフは、雄大な森の霧間気を味わうかのようにゆっくりと歩を進めていた。木と動物の皮で作った複合弓を肩にかけ、背には矢筒を背負っている。人間から見れば三〇代ぐらいに見えるだろうが、エルフは無限の寿命を持つと言われており、実際は三〇〇歳を超えていた。その端麗な顔には大小の傷跡が残っており、これまでに歩んできた人生の激しさを物語っている。

やがて大きな木々に囲まれた小さな空間に出ると、彼は足を止め、大きく深呼吸した。「見回り日和だな。あと何度来られるか分からんが……」

辺りの森は、手入れが充分入っていることを示すように下草は少なく、道を外れなければ歩みを邪魔するものもほとんどない。木々の幹はどれも太く、この森の長い寿命を表している。エルフ特有の長い耳を澄ませば、風の音に混じって鳥のさえずりがよく聞こえた。大森林と呼ばれるこの森を、数千年もかけて維持してきた結果だ。

「エノーリオンさま！ 大変です、エノーリオンさま、どこですかー!?」

不意に大声で自分の名を呼ばれた。たちまち動物たちの気配など周囲から消え去ってし

まう。

エノーリオンという名のエルフは、苦笑しながら後ろへと視線を向けた。まだ年端もない少女のエルフ——ミリーエルが駆け寄ってくるのが見える。

「ああ、やっぱりここにいたんですね！ エノーリオンさまのご病気は軽くないんです、どうか森を見回るのはもうおやめください！」

「なあ、ミリーエル。私は三〇〇年も生きたんだ、病で死ぬのも道理と言っている。弓を持ったまま森で死ねたとしたら、むしろ私にとっては幸せだと思ってくれ」

「長老なんて五〇〇歳超えてるんですからそんなこと言わないでください、まだまだ聞きたいことも一杯あるのに！ あ、それより大変です、フェルトフォルクのホルサがいつもの行商に來ました！」

「ほう、久しぶりだな。だが別に驚くようなことでもないだろう」

ホルサ。エルフの領域であるこの大森林を始め、五芒国のどこにでも出没するフェルトフォルクの遍歴商人だ。扱う商品の幅は広く、なによりも五芒国全土の事情に通じているため、ホルサから旅の話聞くことはエノーリオンの楽しみの一つだった。

「ホルサだけならいいんです！ でも、人間の子供を連れてきたことが分かって！」

「人間を連れてきた？ あのホルサが？」

大森林に人間が立ち入ることは固く禁じられており、もちろん子供も例外ではない。五芒国すべての事情に通じているホルサが、そのことを知らないはずがない。

「またなにか企んでいるな。仕方ない、戻った方がよさそうだ」

「はい、まだ広場の方にいるはずですよ！」

里に戻ると、広場ではすでに騒ぎが始まっていた。

荷を一杯に積んだ馬車があり、フェルトフォルクのホルサがいる。相変わらずフェルトフォルクは小さな種族で、ミリーエルより背が低く、見た目も子供そのものだ。ただフェルトフォルクも当然歳を取る。ホルサの年齢は確かもう七〇歳で、老境に差し掛かっているはずなのだ。ホルサはフェルトフォルクの中でも特段若く見えるらしいが、それにしては若すぎるという気はする、つくづく不思議な種族だった。

そしてホルサの隣には、聞いていた通り子供がいた。人間であることは耳を見れば分かる。フェルトフォルクにしろエルフにしろ、耳に尖りがあるが、その子供にはなかったからだ。

（それにしても、妙に度胸のある子だな）

大勢の困惑したエルフに囲まれ、命すら危ういというのに、その子供に物怖じしている

様子はない。それどころか、初めて訪れたであろうエルフの里に好奇心が抑えきれないといった様子だ。

「悪いが道を開けてくれ」

エノーリオンが駆け寄ると、周囲のエルフたちは誰もが敬意を払って道を譲った。《魔王殺し》の肩書きを持つ者には誰もが敬意を払ってくれる。

「ホルサ。本当に人間を連れてきたのか？」

「やあエノーリオン、まだ元氣そうだなによりだ。いやね、子供の一人ぐらい別にいいと思つて」

ホルサは頭をかきながら笑った。悪戯がバレた子供のような仕草だったが、彼らフェルトフォルクはそんな笑みを浮かべながらたやすく他人を殺せるという一面もある。

「念のため言っとくけどね、僕も連れてくるつもりはなかったんだよ？ でも、この子の方が勝手についてきたんだ。エルフの里にも行商に行くつて言つたら好奇心が抑えきれなかったらしくて」

「子供だろうと定めは定めだ、本来ならば殺されるところなんだぞ？ 他ならぬ人間との盟約によつて」

「だったら殺せば？ この子にも何度も警告はしたんだ、覚悟はしてるはずさ」

ホルサは無邪気に物騒なことを言つてのけた。

だが当の人間の子は、物騒な会話が聞こえてはいるはずだというのに、相変わらず好奇心に満ちた目で周囲を珍しげに見回しているだけだった。

（そんなにエルフに興味があるのか？ ただの人間の子供が？ いや、どこにでも好奇心旺盛な者はいるということか）

一九〇年前、好奇心に負けて人の王に仕えることを選んだエルフがいたことを思い出し、苦笑する。

少しだけ興味を湧き、エノーリオンはその子供の前で膝をついた。

「おまえ、名前は？」

「え？ あ、カレルです」

突然話しかけられたせいか、少年は初めて戸惑った様子を見せた。

「そうだ、言い忘れてたけどキミとまったく無関係な子供でもなかったよ」

ホルサが聞き捨てならないことを口にした。

「どういうことだ？ 人間の知り合いもないくはないが、一〇〇年以上も昔の話だぞ？」

「この子は《狂囃の団》の団長の息子なんだよ。まあ、あの団長は養子も含めて子供が数十人いるから血が繋がってるかは怪しいけど」

「《狂啖の団》か。それは確かに懐かしい名だな」

「知ってるんですか？ 《狂啖の団》のことを」

カレルという少年が、物怖じすることなく訊ねてくる。

「ああ、共に魔王と戦った傭兵団だ、忘れるはずもない。もつとも一九〇年も前のことだ、もう私のことを覚えていた傭兵など誰もいないだろうが」

「あの。お願いです、教えてください、魔王、すべてを破壊する者、つて一体どんな敵だったんですか？ 一体どうやって倒したんですか？」

「いきなり質問攻めか。そんなに気になることか？ もう昔の話だろう」

「それでも知りたいんです。人類は一度魔王に滅ぼされそうになったって聞きました。その影響で、今もこのゴルドリア大陸の東半分は荒野です。一体なにかあったのか、知りたくて仕方ないんです」

「なぜだ？ なぜそんなに知りたがる？」

「僕の父さんは《狂啖の団》の団長として、今も五世国を魔物から守っています。でも、いつまた魔王みたいなすごい敵が出てくるかも分からないのに、魔王戦役のことなんてもう書物にしか書かれていません。それが怖いんです」

エノーリオンは驚かされた。「無知は罪」といった類の諺は、エルフに限らずすべての

種族に共通してあるという。このカレルという少年は、子供ながらに無知の恐怖を知っているのだ。

運命、という陳腐な言葉がエノーリオンの脳裏をよぎった。

《魔王殺し》の二つ名を持ち、まだ生きてるのは恐らく私だけだ

同じ称号を持つ者は人間やドワーフにもいたが、どちらかとうの昔に亡くなったと聞いている。そして唯一生き残っているであろう自分も病に冒され、そう長くはない。そんなとき、まだ魔物との戦いの最前線にいる《狂啖の団》団長の子が、魔王のことを訊ねにきたのだ。それも命がけで。

《狂啖の団》団長の息子となれば、将来父の後を継ぐ可能性がある。そのとき、わずかでも魔王の知識が伝わっていれば、きつと役に立つこともあるだろう。事実、魔王が最後に言い残した言葉をエノーリオンは今もはっきり覚えている。「我は再び汝らの前に立ち塞がるであろう」——と。

すべてを語ることはできない。だがそれでも、伝えられるだけのことは伝えるべきではないか。それがこの出会いの意味なのではと、そう思った。

(すべてホルサの目論見かもしれんがな)

フェルトフォルクという種族は、脳天気に見えてどの種族よりも未来を見据えていると

思うときがある。ひよっとするとホルサは、魔王が再臨するという可能性を考えてこの人の子を連れてきたかもしれない。

決心したエノーリオンは、この場でもっとも強い権力を持つ里の長老に向き直った。

「聞いてくれ、長老。魔王戦役の折、エルフと人間は同盟を結んだ。《狂囃の団》は我が戦友でもあり、その団長の子を見殺しにしたとあつてはエルフの名折れだ。この人の子を今回だけは受け入れてくれないか？ なにかあれば私の名に懸けて償おう」

長老は、まるで返事など決まっていたかのようにすぐに頷いた。

「分かった。掟とはいえ、年端もいかぬ子を進んで殺したくはない。おまえがそう言うのであれば任せよう。《魔王殺し》のおまえにはその権利がある」

「感謝する。ではこの子はしばらく私が預かろう。ホルサ、おまえも異存はないな？」

「構わないよ。さあカレル、これでキミの望みは叶ったわけだ。三ヶ月後にまた迎えにくる。それまでせいぜい好奇心を満たすんだね」

「分かった。ありがとう、師匠」

（師匠だと？ ホルサが師匠だというのか）

エノーリオンは内心で苦笑した。フェルトフォルクの代名詞に、殺しても死なない、というものがある。そのフェルトフォルクの典型とも言えるのがホルサであり、彼を師と仰

ぐとは、末恐ろしいものがあつた。

「ま、待ってください！」

カレルと共にその場を後にしようとしたエノーリオンを、少女の声が引き留めた。ミールエルだ。

「エノーリオンさま、それならわたしも一緒に！ 魔王のことを知りたいのはわたしも一緒です！」

「そういえばそうだったな。分かった、人の子にだけ教えておまえに教えないわけもいくない。ただしこの里にいる間、おまえがカレルの世話をしなさい。それが条件だ」

「ええ!? 私が人間の子供を……?」

ミールエルはひどく嫌そうにカレルを見る。

「なんだよ、おまえだつて子供じゃないか」

カレルがむっとして抗議したのは当然だった。カレルからすればミールエルは同じ年頃にはか見えないただろう。

「わたしはもう二〇よ！ あなたたち人間からすればとつくに成人でしょう！」

「そうなの？ でもエルフ基準で言われてもなあ」

「うるさいぞ二人とも。おまえたちが仲良くしないのであれば、この話はすべてなかった

ことにしてもいいんだぞ？」

そう口にした途端、少年と少女は慌てたように背筋を正し、エノーリーオンを含む周囲のエルフたちの笑いを誘った。

「よし。じゃあ道すがら話してやろう。魔王は本当にとんでもない敵だったんだぞ。見た目だけなら黒い甲冑をまとった大柄なエルフ、あるいは人間と大して変わらん。だが甲冑の中には誰もいなかった。ただ黒い霧のようなもので満たされていただけだったんだ」

「人とかオークが入ってたんじゃないの？」

「魔王はオークが崇めていた存在だったのは確かだが、真実は分からん。確かなことは、魔王はオークだけではなくオークやゴブリンといった魔物たちを従わせ、我々エルフの同胞すら仲間に入き入れすべてを滅ぼそうとしていたということだ」

少なくとも二万人以上のエルフが、魔王の軍勢に加わったことが分かっている。彼らは魔王の影響を受けたためか体が灰色となり、侮蔑を込めて灰エルフと呼ばれるようになった。エルフにとっては忘却したい負の歴史だ。

「でも、最後には勝てたんだよね？」

「ああ、だからこうして生きていられるというわけだ。知っているだろう、我々には女神オルタナから恩寵を授けられたという『アレン・ファン・アレン・ハムの聖女』の導きがあった。彼女の加護

がある限り、我々は勝てないにしても負けることだけは避けられたんだ——」

この後、カレルという名の人の子はエルフの里に数か月滞在し、魔王戦役についてのいくばくかの真実と、エルフの戦いの術の一端を学ぶ。

それはたった一人の少年が体験した小さな出来事に過ぎない。だが、後世の吟遊詩人たちがカレルの英雄譚を歌うときは、必ずこの出来事が序章を飾ることになったという。

時に討伐歴一九〇年、花が咲く月（五月）。五芒国にカレルという名が知れ渡るのは、この八年後のことである。

第一章 《狂囃の団》

1

「ゴルドリアド大陸の東半分は、危険な魔物が徘徊する赤茶けた大地——《呪われた地》と呼ばれている。かつて出現した魔王の影響によるものとされており、討伐歴一九八年となった今に至っても人やエルフ、ドワーフの侵入を阻み続けている。

そんな《呪われた地》に、二人の若い男女が足を踏み入っていた。若い男の方は腰に一本の剣を、背には弓矢と大きな背囊を担いでいる。それなりの重量になるはずだが、その足取りに揺らぎが出ることはなかった。

また、どんな害があるかも分からない砂埃から身を守るため、二人とも顔を含めた全身を外套で覆っていた。しかし時折吹く強い風が、二人の顔を隠す外套をはためかせるときがあった。もしその瞬間を見逃さなければ、二人とも十七、八歳ほどの若さであり、また女の方はエルフ特有の細く長い耳をしていることに気付けただろう。

「ミリーエル、耳が見える。布を巻いてくれ」

若い男の方が、心配そうに声をかけた。

「大丈夫だって。こんなところで人に見られることなんてまずないし」

「いや、遺跡荒らしの連中はもうどこにいてもおかしくないんだ。頼むから隠してくれ」

「あーもうカレル、あんたビビりすぎよ。今更エルフを奴隷にしようなんて度胸のある人間いないわよ」

「分らないぞ。エルフには分からないだろうが、人間は一攫千金に命を懸けることだって珍しくないんだ。遺跡荒らしなんて尚更そんな連中ばかりだしな」

ただでさえ若い女エルフは莫大な値がつくらしいんだぞ——と、カレルと呼ばれた青年は聞き取れない声で付け加える。

「もう、分かったわよ。これでいいんですよ」

ミリーエルと呼ばれた若い女は、文句を言いながらもターバンを取り出し、耳と髪をまとめて覆った。それを見てようやくカレルも安堵する。

（考えて見れば不思議なものだ）

カレルは最近、ミリーエルを見る度にそう自嘲せずにはいられなかった。

エルフと人間は、極めて微妙な関係にある。かつて人間は、エルフを奴隷として扱った

ことがあった。それは昔から厳しく禁止されていた行為ではあったが、美しく歳を取らないエルフは、男女を問わず莫大な額で取引されたため、欲に目が眩む奴隷商人は後を絶たなかった。

そのことを知ったエルフは、当然ながら激怒した。魔王戦役の折、一部のエルフは魔王側に与して人間に宣戦を布告したほどだったというから、彼らの怒りは凄まじかったのだろう。

もつとも、ほとんどのエルフは人間と共に魔王と戦う道を選んだ。だが人とエルフが手を取り合うには、当然ながら二度とエルフを奴隷にしないという誓約が必要だった。今やエルフの側から人間に接触することはともかく、その逆は厳しく制限され、許可なく人間がエルフの住む大森林に立ち入ることは堅く禁止じられている。

(にもかかわらず、俺はエルフの里に無断で立ち上った上に、今はこうして若い女のエルフと一緒に《呪われた地》を歩いているんだ)

ミーリエルはエルフの例にもれず、目鼻立ちが整っていて、カレルの目から見ても可愛らしいと思う。しかも年齢は二八だが、見た目はまだ一四、五歳にしか見えない。もしフライスラント自治領の奴隷商人にでも売り渡せば、一生かかっても使い切れない大金が手に入るだろう。カレルにそのつもりは微塵もないが、ミーリエルにはその危険性を自覚し



て欲しいところだった。

「それにしても、この光景見るとつくづく思うんだけど」

周囲の赤茶けた大地を見回しながら、ミリーエルは口を開いた。

「もう討伐歴一九八年ってことは、魔王討伐から一九八年も経ってるわけでしょ？ 五〇年ぐらい前から《呪われた地》も東へ縮小し始めたって言うけど、本当にこの荒れた地がなくなる日なんて来るのかしら？」

「そうだな。ちよつと東へ入っただけでこの荒れっぷりだもんな。どれだけ凄かつたんだよ、魔王って」

普通、北へ行けば行くほど寒くなるという知識はカレルにもあった。しかし、周囲に広がるこの《呪われた地》ではそんな常識も通用しない。人知を超えた力によってこもも変貌した地が、そう簡単に緑の地に戻るとは思えなかった。

やがてカレルとミリーエルは目的地に辿り着いた。小さな農村である。ただし、この農村に人が住んでいたのは二〇〇年ほど前のことであり、今は古ぼけた家の残骸がかるうじで見取れる程度だった。

「さて、始めるか」

カレルとミリーエルは背囊から持ち運びができる小さな鋏を取り出し、地面を掘り始め

た。

《呪われた地》が年々東へと後退していくことに伴い、新たな村が開拓され、ある奇妙な仕事を生業とする者たちが現れた。遺跡荒らしだ。かつて魔王に滅ぼされた集落を発掘し、一攫千金を目指す者たちである。

もつとも、境界線から近いこの辺りの遺跡は、徒党を組んだ遺跡荒らしによってすでに荒らされており、大した物は出てこない。ただ、カレルとミリーエルの目当ては金銀財宝ではないので、すでに荒らされた遺跡を調査する価値は充分にあった。

しばらくすると様々な物が出土し始めた。かつてここが農村であったことの証——木製の食器、鉄製の農具、家の残骸、そして乾ききった人骨だ。

カレルが興味を持ったのは、人の頭蓋骨だった。頭頂部が派手に割れている。

「オーガの棍棒にでもやられたのか？」

「珍しくないでしょ、そんなもの」

ミリーエルの反応は素っ気ない。

かつて魔王は、オーガを含む多くの魔物を率いていたという。魔物に殴り殺されたと思しき骨が出てくることは珍しくなく、カレルはすぐに土を掘る作業に戻った。

「あつたわ、本よ！」

やがて目当ての物を見つける。本棚の残骸と、その中に残っていた本だ。

だが本を開いたミリーエルの表情はすぐに曇った。長年土に埋まっていた本は、触っただけでポロポロになる。

「だめね、ほとんど読めないわ。どうか読めるところも、ありきたりな農業や医療の話ばかりよ」

「やっぱりこの辺りじゃもう無理か……」

今もそうだが、農民が読み書きをすることなどそうない。魔王戦役の折、この辺りの農民が魔王のことを書に記す機会などそうあつたとは思えない。

もつと東へ行けば、かつて魔王に滅ぼされた巨大な帝国があるとされている。その跡地ならば重要な書物を見つけることも叶うだろうが、まだ地理も明らかになっていない《呪われた地》の奥へ入り込むことは、どんな熟練の遺跡荒らしでも自殺行為だ。《呪われた地》の領域がもつと東へと後退し、拠点となる新たな村が開拓されるのを待つしかないだろう。

「まずいわね、天気が怪しくなってきたわよ」

ポロポロになった本を背囊に収めたミリーエルが、東の空を見ながら言った。

カレルも東へと目をやる。灰色の嫌な雲が近づいていた。

「本当だ。くそつ、まだ来たばかりだったのに」

「命あつての物種よ。帰りましょ」

天気ばかりはどうしようもなかった。外套もあるので多少雨に濡れるぐらいは構わないが、草木がまともに生えないこの辺りの雨は思わぬ激流を生み出し、帰還を困難にしかねない。まして《呪われた地》は魔物が徘徊する危険な場所だ。長居しないに越したことはなく、カレルたちは手早く荷をまとめると、西へ引き返し始める。

辛い、魔物と遭遇することはなかった。そのまま一時間ほど歩く足元が赤茶色から緑へと変わり始め、遠くにはアレンヘム公国の森林も見えてくる。《呪われた地》とアレンヘム公国の境界線へと戻ってきたのだ。別に目に見える明確な境があるわけではないが、地面の色が茶色から緑へ変われば、それが境界線であると認識されている。

ここまで来れば危険は大きく減る。にもかかわらず、カレルは警戒感を露にして足を止めた。

「どうしたの、急に止まったりして？」

後ろにいたミリーエルが、当然のように声をかける。

「魔物の足跡だ。まだ新しい」

足跡を含め、魔物の痕跡を見つけるのは《呪われた地》の探索に必要な技能だ。ミリー

エルもカレルと同じように地面を覗き込んだ。

「本当ね。これ、一〇〇匹はいるわ。ゴプリンだけじゃない、オーガの足跡もある」

「まずいぞ、この方角。どこかの村を探してるんだ」

《呪われた地》に棲むオーガは、ゴプリンの集団を率いてよくアレン・ヘム公国へと侵入する。食糧確保のためというのが定説だ。彼らは人里を荒らし、家畜や人の肉を喰らう。間違ひなくこの足跡も、人間の領域へと侵入しようとしている魔物の集団のものだ。

「他の隊の連中に伝えるしかないわね。来る途中で見た覚えがあるし」

「分かった、行こう」

魔王戦役より一九八年、人間もただ魔物に喰われるのを待つだけではなく、備えを怠つたことはない。その備えの筆頭が、カレルが所属しているアレン・ヘム公国直属の傭兵団《狂噬の団》だ。《狂噬の団》は魔王戦役でも多大な功績を挙げ、以来、一九八年にわたって《呪われた地》から侵入してくる魔物を撃退し続けている。境界線の近くには、魔物の侵入を警戒している《狂噬の団》の部隊が必ずいるはずなのだ。

「いた！ おおい！」

森の入り口あたりで、様々な武器で武装した二〇人ほどの一団を見つけた。場所が場所なら山賊と見間違えかねないが、こんなところで活動する山賊などいるはずもない。

声をかけられた彼らは一瞬身構えたが、こちらの格好を見て少なくとも敵ではないと判断したのでろう、すぐ警戒を解いた。

「東から来たから遺跡荒らしかと思つたが、第七隊の者か？ どうした？」

話しかけてきたのは、その場にいる誰よりも背が低い髭もじゃの男だった。ただし横幅は誰にも負けていない。ドワーフと呼ばれる種族の典型的な特徴だ。魔物はドワーフにとっても敵であり、《狂噬の団》には多くのドワーフが参加している。

「魔物の集団の足跡を見つけた。このままじゃ近くの村が襲われかねない、手を貸してくれないか？」

「足跡？ 確かか？」

「あんたたちを騙してもなんの意味もないでしょ。それにオーガの足跡もあったわ。腕の見せ所でしょ？」

ミリーエルが半ば挑発するように言った。

スカーフで耳を覆っている彼女がエルフであることはバレてないが、もしバレたとしても一騒動起こることは間違ひないだろう。エルフとドワーフは元来仲が悪いことで知られているからだ。

「ふむ、オーガか。本当ならば聞き逃せんな」

オーガの名を聞くと、彼らの顔に戦意がみなぎった。

「待ちぼうけも飽きたところだ、行くぞ者ども。お主ら、案内を頼めるか？ 第七隊の連中に戦えとは言わぬ、案内だけでよい」

《狂啗の団》と言えど、その全員が戦いを専門としているわけではない。中には魔物の生態や戦いの記録を残すための隊もある。それがカレルとミリーエルが所属する第七隊だった。特に魔物の中には火を吐いたり、毒を持つ種もいる。記録は決して軽視できない仕事だった。

「分かったわ、付いてきて。でも《呪われた地》の調査が仕事の第七隊を甘く見ないで頂戴。あたしたちも一緒に戦うわ」

ミリーエルが勝手に言い放つ横で、カレルは人知れず渋い顔をしていた。

危険な魔物と好きこんで戦いたくはない。だが自分たちでも多少の戦力にはなるだろうし、なにより魔物との戦いから逃げ出したなどと知られたら父親になんと言われるか分からない。反対はできなかった。

「はっはっは、よう言うた、それでこそ《狂啗の団》の一員よ！ そういえば名も名乗っておらんな、わしは隊長のドルダンだ」

ドルダンというドワーフはミリーエルの気概を気に入ったようだった。もし彼女がエルフだと知ればまた違った反応をしただろうが。
カレルとミリーエルが先導する形で、二〇人ほどの傭兵たちを足跡のあった場所まで連れて行く。彼らの中には女性の傭兵も含まれていたが、さすがに屈強で、その移動は早かった。

「あったわ、ここよ。足跡はそう古くないからまだ追いつけるとは思うけど……」
「ふうむ。わしにはただの地面にしか見えんが、分かるのか？」
ドワーフの問いかけに、カレルは頷いた。

「ああ、間違いない。フェルトフォルクの遍歴商人と旅したことがあって、教え込まれたんだ」

「ほう、フェルトフォルクに師事したか。ならば無下にもできんな」

フェルトフォルクのたくましさを知らない者はいない。人間の子供と見分けがつかない非力なフェルトフォルクという種族が今日まで生き残ったのは、様々な生き抜く術を身につけているからだ。

「数と種類は？ ゴブリンとオーガだけか？」

「見たところはな。ゴブリン一〇〇匹と数匹のオーガってところだろう」

「待って、おかしいわ。この足跡はオーガにしては大きすぎる。ひよっとして……」

ミリーリエルは草や落ち葉を払いのけた。素人にも分かるようなくぼみが露になる。「ふむ、まずいな。その足跡ならわしにも分かる。トロールだな」

ドルダン隊長がその単語を口にする、傭兵たち全員の顔が強張った。

トロール。小さな家ほどもある巨大な魔物で、子供でもその怖さは知っている。「急ぐ必要があるようだ。カレルよ、足跡はどっちへ向かっている？」

「やや南西よりだな。行き先は……レーベンか？」

「いや、レーベンは去年トロールに滅ぼされてまだ復興しておらん。危ないとすればエルジュの村だ」

ドルダン隊長は決心したように仲間の傭兵たちを振り返り、言い放った。

「全員聞け。我ら《狂噬の団》は、魔物と戦い死ぬのが仕事だ。覚悟はできておるな？」
トロールと聞かされたためか、仲間の傭兵たちの顔はまだ強張っていた。だがすぐに誰もが口々に言い放つ。

「隊長、行こうぜ。そのために来たんだ」

「そうだ！ 死ぬのが怖くて《狂噬の団》に入れるか！」

「エルジュのすぐ近くにはわたしの村があるわ、放つてはおけない！」
それが虚勢であることは明白だった。

もつとも、《狂噬の団》は虚勢を張ることを否定しない。相手は強力な力を持つ魔物なのだ。虚勢だろうとなんだろうと、まず戦う勇気を持つことが必要なのだ。
「よく言った、ではまず魔物を追跡し、数を見定める。ゴプリンとオーガだけなら戦いも辞さぬが、もし本当にトロールがいたとすれば我々だけでは手に負えん、援軍を呼びに行く。いいな」

傭兵たちは領き合い、あらためてカレルを先頭に行軍が始まった。

2

「アイデルス・フレイスタルを以て中心に据えた五芒国フレイスタル・コングレガチオンの北東に、アレンヘム公国はある。

建国のきっかけは魔王戦役の後、《ハイルグ・ファン・アレンヘムの聖女》の夫であった人物が、その功を認められ、公爵の地位と領土を与えられたことにある。そして現在に至るまで、歴代の当主たちは《呪われた地》から侵入してくる魔物から五芒国を守るという責務を忠実に果たし続けてきた。

だがこれまで維持できた平和が、今後も続く保証はどこにもない。事実、アレンヘム公国は現在、無数の大きな問題を抱えていた。その一つが、当代の国主であるアルトフ・フレイクス・ファン・アレンヘムの病である。体の中に毒素を出す瘡ができるという、魔王戦役

以来、幅広く蔓延はまひろしている重い病だった。

（せめて馬を乗り回す体力さえ残っておれば……）

病床びとくしょうの中で、アレン・ヘム公は何度となく嘆いていた。エルフヤドワーフ、フェルトフオルクといった種族はともかく、ほとんどの人間は五〇を迎える前に病気などで命を落とすと言われている。自分の五〇という年齢ねんねいを考えれば、死ぬのも仕方ないかもしれない。

それでも、ベッドから動けない現状はもどかしくてならなかった。せめてたった一人の家族である一七歳の娘むすめに、後を託せる婿むこを見つけてやりたかった。

「失礼いたします閣下。ランメルト団長がお見えです」

部屋に入ってきたのは、忠実な老執事じしのファビアンだった。

「来たか。通してくれ」

ランメルトはアレン・ヘム公国が抱える傭兵団《狂囃の団》の団長だ。傭兵団と言えば荒くれ者、ならず者の集団というのが一般的な印象だろう。事実、《狂囃の団》の団員には山賊と見まがう風貌ふうぼうの者も多い。

しかし団長となると、戦う兵士である以前に政治家であり、兵站の責任者であることを求められる。二〇〇年もの間、無敵を誇ほこってきた《狂囃の団》の団長ともなれば尚吏血なまぢくちの気が多いだけでは務まらず、見識と人望によって選ばれることが普通だ。

ランメルトもそんな団長の肩書きかたがに相応ふさわしい人物だ。年齢は四〇半ば、人の性格は顔に出るというが、彼の目つきはすべてを見抜くように鋭とどく、鼻も高く、理知的という印象を受ける。身なりも整えているので、それこそ貴族と言っても通用するだろう。

「閣下、ご無沙汰しております」

まるで貴族のように、ランメルトは見事な一札をしてみせた。

「そう畏かしこまらんでいい、悪いが社交辞令に付き合ってやれる体力もないのでな」

「お体の具合、よろしくないのですか？」

「そのようだ。まあ覚悟はしていた。医者によると、もはや痛み止めを飲むしか対処もないらしい」

ランメルト団長は言葉に詰まった様子だった。聡明な傭兵団長も、病が相手ではなににもできないし、余命あいのち幾ばくもない雇い主よとにかける言葉もすぐには見つからなかったのだろう。珍めづしく戸惑とまどう彼の姿を見て、アレン・ヘム公は少しだけ表情を緩めた。

「そう複雑な表情をするな。私も覚悟はしていたことだし、別に同情してもらうために来てもらったわけでもない。今後のことについて話し合っておきたいのだ。女王陛下のことは聞き及およんでいるな？」

「は。病は重いと聞いております」

「そうだ。私同様、先は長くないそうだ」

五芒国の統治者にして守護者、アレン・ヘム公がただ一人頭を垂れる義務を負った相手、フリーデルス王国国主たるリーセロット女王。その女王もまたアレン・ヘム公と同じ病を患い、昏睡状態にあることは、今や誰もが知る事実だ。

「人間、皆死ぬ。不敬かもしれないが、女王陛下とと同様だ。ただ問題はその後だ。女王陛下が亡くなれば、南のフライスラント自治領はもはや誰にも止められんだろう」

「フィクトル総督ですか。やはり我が国に戦争を仕掛ける時？」

「兵を動員し、多数の武器を集め、戦争の準備はほぼ完了しつつあるようだ。我が国と一戦交えなければもはや収まりがつかぬというところまでできておる」

アレン・ヘム公国は、魔物の侵入から五芒国を守るために建国された。しかし目立った産業もなく、また常に魔物の危機にさらされている国が繁栄するわけがない。そこでアレン・ヘム公国には二つの大きな特権が与えられていた。

自由通行権と、南東の山岳地帯にあるドワーフの王国との独占交易権だ。アレン・ヘム公国はドワーフの厚意で金や銀を安価で仕入れ、そして自由通行権によって盛んとなった交易で莫大な富を生み出し、強力な傭兵団を一九八八年に亘って維持してきたのだ。

他方、南に国境を接するフライスラント自治領では、奴隷による大規模農業・大規模採

掘が盛んだ。彼らから見れば安価な金銀を垂れ流すアレン・ヘム公国は邪魔な存在でしかない。おまけにこの五〇年、フライスラントの奴隷がアレン・ヘムへ逃げ込む事案が後を絶たない。アレン・ヘム公国の国境が広く開かれ、また《呪われた地》の境界線が年々東へと後退していることに伴い、積極的に新たな村を開拓しているためだ。

『討伐歴はすでに一九八八年を数えるが、魔王再臨の兆しはまったくなく、一九八八年も前に与えられた特権も見直す時期が来ているのではないか』

そう主張するフィクトル総督の声が唖れることはないという。

「厄介な事態になりましたな。フライスラントは莫大な額の王国債を保有し、フィクトル総督の息子はエレオノーラ王女殿下と正式に婚約しました。もはや王国にも総督の野望は止められないでしょうな」

「うむ。せめて私も娘にいい婚約者を見つけてやればよかったのだが、こうも急に体調が悪化するとは思わなんだ。益暗と悪名高かろうが、ヴェツセル殿下を婿入りさせらればと後悔しておる」

「妾腹の第一王子であれば可能性はあったかもしれないかもしれませんが、ところで閣下。この時節で申し上げたくもないのですが、実は私からもよくないご報告があるのです」

アレン・ヘム公は顔をしかめずにはいられなかった。

「たまにはいい話を聞きたいものだ。一体どうしたというのだ？」

「恐れ入ります、ここにホルサをお通ししてもよろしいですか？」

「ホルサ？ ああ、フェルトフォルクの御用商人か。構わん、通せ」

間もなくランメルトが招き入れた人物を見れば、誰もがまず自分の目を疑うだろう。その人物は、見た目は十歳ほどの子供にしか見えなかったからだ。公爵に子供を紹介するなど意味が分らない——と誰もが思うだろう。

だがアレンヘム公は驚かなかつた。ホルサがフェルトフォルクであることを知っていたからだ。

「ご無沙汰しております、アレンヘム公爵閣下」

ホルサは、子供にしか見えない無邪気な笑みを浮かべながらも、作法に則つた見事な一礼を試みせた。

「フェルトフォルクというのは本当に不思議なものだな、以前会つたときとなに一つ変わつておらぬではないか。確か歳は八〇になつたのではなかつたか？」

「僕は少々子供っぽいだけです。人間でもいるでしょう、見た目が若い人つて」

確かに二〇代にしか見えない三〇代の間もいないわけではない。しかしホルサの見た目の若さは、常軌を逸しているようにしか見えなかつた。

「閣下、ご存じの通り——」とランメルト団長が会話に入る。「ホルサは我が《狂噬の団》と長年に亘つて商いをしてまいりました。大陸全土から多くの物資と情報とを調達してきた、我が《狂噬の団》になくはならない遍歴商人でございます」

フェルトフォルクの遍歴商人。それは五芒国において極めて特異な存在だ。

たとえば農民は多くの領主にとつて財産であり、自由な移動など許されず、逃亡して捕まれば罪に問われる。一方、誠実な商売をする限り、王家の名において五芒国を自由に行き来することが許された種族がいる。それがフェルトフォルクの遍歴商人であり、政治に携わる者ならば誰もが一目置く存在でもある。彼らほど他国の情報に精通している者はないのだ。

「ふむ。なにか他国の動向を察知したということか？」

「はい。閣下、不遜な推測を申し上げることをお許しください。女王陛下の崩御はもはや時間の問題です。そしてもし崩御となれば大々的な国葬が行われ、当然ながらすべての貴族が弔問のため王都へ向かうことになるでしょう」

「陛下が崩御されたとなれば当然だろうな。それで？」

「公爵閣下は病床の身です。となると閣下は代理の使者を立てねばなりません。公爵閣下の代理が勤まるほどの候補となれば二人だけ。こちらのランメルト団長か、あるいは……」

「娘のセシリアか」

「御意にございます。しかし、同業のフェルトフォルクからある情報を聞いたのです。フィクトル総督は、このアレン・ヘムから派遣される弔問の使者を人質に取る準備をしているとのこと」

「なんだと!? 本当か?」

「フェルトフォルクの遍歴商人は、誠実を宗とします。ウソをつく理由がありません」そうホルサを擁護したのはランメルト団長だった。「それにフィクトル総督が我が国への侵攻を企んでいることはもはや疑いありません。私かあるいはセシリアさまを人質に取り、我が国へ攻め入るという可能性は考慮に値します」

アレン・ヘム公国最強の軍事力である《狂啗の団》の団長、あるいは公爵の一人娘。いずれも人質として十二分の価値があることは自明の理だった。

「なるほど、いかにもフィクトル総督が考えそうな手か。かといって弔問の使者を出さねば、『王家に対する忠誠を疑う行為』とフィクトルめが喜んで策を弄するだろうな」公爵の不安を断ち切るように、ランメルト団長は背筋を正した。

「閣下、対抗手段は一つです。セシリアさまは五芒国の未来を背負った《アレン・ヘムの聖女》、この国を離れることがあってはなりません。陛下が崩御された際には、私が弔問の

使者を務めましょう」

「自らフィクトルめの翼に飛び込むというのか?」

「もちろん無策で死地へ飛び込むつもりはございません、できる限りの備えはいたします。それに新たに即位する王にフィクトル総督の野望をお伝えすることができれば、戦争を止めることも叶うかもしれません」

フライスラントに莫大な借金がある王家が、今更こちらの味方をしてくれるとは思えなかった。だが、聡明なランメルト団長ならば可能性はあるかもしれない。それに、その役割はまだ一七歳の娘には任せられないだろう。それが分かっていたからこそ、アレン・ヘム公はランメルト団長の提案を拒否できなかった。

「本当によいのか? 相手はあのフィクトル総督だ。どれだけ備えがあったとしても、生還できる可能性は決して高くなかろう」

「閣下。我が《狂啗の団》において死は身近なもの、恐れるに値しませぬ。ましてや私は団長として団員を死に追いやることを仕事としてきました。このようなときに命を張れねば団長としての資格はありません。セシリアさまの代わりとなれば尚更のこと」

アレン・ヘム公はじつとランメルト団長を見つめた。互いにそれなりに歳も取った。ランメルト団長が今の言葉をどんな気持ちで口にしたのかは、アレン・ヘム公にもよく分かった。

「……これ以上の否定はおまえへの侮辱になろう。だが、なればこそ問わざるを得まい。もしおまえの身になにかあったとすれば、誰に次の団長を任せればよい？ 然るべき後継者を定めておかねば《狂囃の団》の力は大きく削がれよう」

「実は、その点について提案がございます」

口を挟んだのはホルサだった。

「ランメルト団長には多くの子がおりますが、僕は以前その一人を預かったことがありますが、まだ若くはありますが、団長の器にあるかと」

公爵にとって、今日一番いい知らせだった。いつ死ぬか分からない立場にあって、後を託せる若者の存在ほど心強いものはない。それがランメルト団長の子であれば尚更だ。

「本当か、ランメルト？ おまえの息子にそれだけの大器がいたのなら喜ばしいが」

「父親としていささか推薦しかねるのですが……」と、珍しくランメルトは言葉を濁した。「というのもその息子というのは子供の頃よりホルサと五芒国を旅して周り、一八になってようやく《狂囃の団》に入団したものの、調査を専門とする隊を希望し、毎日のように《呪われた地》へ足を踏み入れ、今では遺跡荒らし同然の有様なのです。団長の座など勤まるかどうか……」

「ご安心ください、団長はこのように申しておりますが、彼は僕が一〇年をかけて育て上

げた逸材。もちろん、若さ故に周囲の支持を必要とするでしょうが、ランメルト団長に万

一のことがあれば必ずや過不足なく《狂囃の団》を統率するでしょう」

「実に興味深い話だ。ランメルト団長、その息子の名はなんというのだ？」

「は——」

ランメルト団長がまさに口にしようとしたそのとき。

ドンドンとドアを強く叩く音が響き渡った。すぐにドアが開き、忠実な執事のファビアが入ってくる。

「閣下、お話し中申し訳ありません。至急ご報告したいがございます」

「ふむ、ファビアンが会談の最中に飛び込んで来るとはよほどの用向きだろう。今すぐ報告を聞く非礼を許してくれ」

「もちろんです閣下。しかし私とホルサが同席してもよろしいので？」

「《狂囃の団》に隠しておく事実などないし、フェルトフォルクに隠せる情報もそうはあまるまい。ファビアン、何事だ？」

「はい。エルジュより赤の狼煙が上がっていると報告がありました！」

エルジュ。アレンヘム公は、それが最近開拓された新しい村の名であることをすぐに思いついた。そして赤の狼煙は、魔物の襲撃を受けたことを示している。

「そういうことであれば、それほどご心配には及ばないかと」と、ランメルト団長。「魔物の襲撃から五芒国を守るこそ我ら《狂嘯の団》の使命。赤の狼煙が上がった段階で、すでに大隊長を中心に準備を始めていることでしよう」

「それを聞いて安心した。慌てたところかどうかにかなるものでもない、《狂嘯の団》の奮戦に期待しよう」

だが公爵と違い、ファビアンが落ち着くことはなかった。

「それが閣下！ セシリアさまが巡察中であることはご存じかと。確か予定では、今日立ち寄っているのがエルジュなのです」

「なんだと!? セシリアが!？」

アレン・ヘム公爵家は代々、当主あるいはその代理が国内を巡察するというしきたりがあった。魔物の襲撃はいつあるか分からない。備えを疎かにしないためには、綿密な巡察が欠かせないからだ。

現在アレン・ヘム公は病床にあるため、父の名代として娘のセシリアが領内を巡っている。魔物の襲撃に遭遇することがあってもおかしくはない。

「重ねて申し上げますが閣下、ご心配には及びませぬ」

動揺する公爵に、ランメルト団長はあくまで冷静に続けた。

「村々に備えた伝道所に逃げ込みさえすれば、一日やそこらは持つでしょう。まして今日は切り込み隊長がフェンロー城塞に控えているはず。彼に出撃を命じれば、たとえゴブリンが一〇〇〇匹、いやと恐れるに足りませぬ」

「そうか、歴代最強の切り込み隊長がいてくれたか」

傭兵団において、団長以上に尊敬を集めることがあるのが切り込み隊長だ。先陣を切つて戦場に飛び込む切り込み隊長は、団長以上の強さを求められる。その役職を与えられるのは、常に最強の傭兵でなければならない。そして現在の切り込み隊長は、歴代最強の二つ名で呼ばれている。

「彼が行ってくれるなら安心だ。なんとしても娘を無事連れ帰ってくれ」

「承知しました。この国の未来のため、《アレン・ヘムの聖女》を失うわけには参りませぬ。後はお任せください」

ランメルト団長は慌ただしく立ち去った。

アレン・ヘム公にとって、セシリアはたった一人の家族である。備えはあるとはいえ、万が一のことがあれば——と考えると、気が気ではなかった。

なにより、アレン・ヘム公爵家の娘は代々《アレン・ヘムの聖女》として神の恩寵を受け継いでいる。一九八年前の魔王戦役において人類が勝利したのも、聖女の夫に公爵位が与え

られたのもそのためだ。王家とアレン・ヘム公爵代々の当主、それから《狂啖の団》団長にしか知らされていない究極の力を、公爵家の娘は代々受け継いでいるのだ。ただし、その力が目覚めるにはまだ時間がかかる。

「亡き妻も、私の母も、神の恩寵に目覚めたのは二〇過ぎだったという。セシリアはまだ一七歳。せめてあと三年は時間を稼がねばならぬのだ……」

「なにもできない病床の身を恨みながら、アレン・ヘム公はただひたすらに娘の身を案じ続けた。」

3

アレン・ヘム公爵がランメルト団長を部屋に呼ぶ少し前のことである。

たわわに実り始めた麦畑の中を、騎乗した二〇人足らずの団が進んでいた。

先頭を行くのは美しい少女だ。長い金色の髪は風にゆらめく麦畑の中でよく映え、上品さを保った旅装は彼女の気品を一層華やかなものにしていった。その引き締められた顔つきからは、大人になりきれしていない少女らしい美しさと、少なからぬ凛々しさが見て取れる。騎士のように武装した従者たちが彼女に続いている光景を見れば、誰もが貴族の子女とその護衛の団だと考えるだろう。

事実、一団の中には旗を掲げる者がいた。旗印は二本の剣と盾。アレン・ヘム公爵家の家紋であり、その旗印を堂々と掲げられる者など、この国には二人しかいない。アレン・ヘム公とその一人娘、セシリアである。

「セシリアさま。エルジュの村が見えて参りましたぞ」

護衛の騎士であるブレイムスの声に、セシリアは頷いた。

「予定通りね。天気もいいし、今日は順調に進めそうね」

そう応じながら、辺りを見回す。

（この辺りの土地も、すっかり豊かになったものね）

五〇年ほど前、この辺りの土地はまだ《呪われた地》、すなわち赤茶けた大地だったという。しかしこの五〇年で潮が引くように《呪われた地》は年々東へと後退し、新たな村を開拓することもできるようになった。今向かっているエルジュの村もその一つだ。

やがてセシリアたちは麦畑を抜け、一つの村に辿り着いた。すでにセシリアがやってくることは知らされていたためか、多くの村人が平伏して待っていた。

「聖女さま、このような辺鄙な村にお越しくださり、村民一同感謝の言葉もございません」
村長と思しき年配の男が、村民を代表して言った。

聖女。その呼ばれ方には、いつまで経っても慣れない。

「そうも畏まる必要はありません。わたしはわたしの責務を果たしているだけですから」
 「ですが我々のような元奴隷の難民に、土地と生きる術とを与えてくださったのは公爵様
 です。機会さえあれば、我々は嬉々として何度でも頭を垂れましょう」

彼らの感謝はありがたかったが、このままでは話が進みそうにない。それにここで立ち
 話をして他の農民たちの作業を邪魔するのもセシリアの本意ではなかった。

「分かりました。では早速ですが、あなたの家にでもうかがっていいかしら？ 馬に半日
 揺られて疲れているものですから」

「これは失礼しました。それでは狭い家ですがどうぞこちらへ」

開拓されたばかりの村では、どの家も自然と似た造りのものとなる。村長の家も同様で、
 木と茅葺きの質素な家の一つがそれだった。

「聖女さま、このような場所によくおこしくださいました！」

中でセシリアたちを待っていたのは、一〇歳ぐらいの元気な少女だった。年齢からして
 村長の孫娘だろう。

「どうぞこちらへ！ そまつですがお茶を用意してます！」

緊張しきっているのがよく分かる。セシリアは少女が少しでも気楽になるようにと、笑

みを浮かべた。

「ありがとう。頂くわ」

少女はセシリアをテーブルへ案内すると、粗末な木のポットでお茶を注いだ。

一人だけ付いてきた護衛のブレイムスが、背後で渋い顔をしているのが分かる。農民が
 出したお茶を、公爵の娘が飲むことにいい顔はできないらしいのだ。

だが、セシリアからすればどうでもいいことだ。ただでさえ長旅で喉が渴いている。遠
 慮なくお茶を口に運ぶ。

「あら、おいしい。変わった香りね」

率直な感想を口にする、村長は自分が褒められたかのように頬を緩めた。

「この辺りに変わった杉が生えておりまして、試しに乾燥して炒ってみました。香りは
 ともかく味が微妙なので他の茶葉と混ぜてみたところ、美味しいと評判です。この村の
 特産にでもしようかと考えております」

「いい考えです。知つての通り、我が公国では自由な商売が認められています。上手くい
 くことを祈ります」

この村を開拓する初期費用は、すべてアレンヘム公国から無利息無担保の借金という形
 で供与されている。村の経済的自立に繋がる行動は奨励すべきだった。

「マノン、私は聖女さまと大事なお話があるから、外で遊んできなさい」

「いいの？ やったー！」

堅苦しい役目から解放されたせいか、マノンと呼ばれた少女は初めて年齢相応の無邪気さを見せた。

「あ。ご、ごめんなさい」

「いいのよ、子供なんだから。さ、お行きなさい」

セシリアが弁護すると、マノンという名の少女は満面の笑みを浮かべて家を出て行った。

「元氣なお孫さんね。ご両親は？」

「亡くなりました。いえ、氣遣いは無用です。我々逃亡奴隷の身では身内が一人生き残っただけでも幸いというべきですから」

この村の住人は、その全員が南に国境を接するフライスラント自治領の逃亡奴隷だ。奴隷の逃亡は、捕まれば重罪として罰せられる。彼らがフライスラントを脱出するのにどれだけの苦難があったかは想像を絶する。

そして彼ら逃亡奴隷の行き先は、自由な出入りが認められている上、年々領地を広げているここアレンヘム公国しかあり得ない。フライスラント自治領のフィクトル総督に敵視される理由の一つでもある。

「村長。この地の開拓は順調ですか？」

「はい。この辺りも元は《呪われた地》だったと聞きますが、もはや影響はまったくなく、畑にも作物が実っております」

「それは朗報です。ただ、依然として我が国には魔物の脅威があります。ましてここは《呪われた地》からも非常に近い場所、警戒だけは怠らぬように」

「ええ、去年も一人村の外でやられました。魔物の恐ろしさは骨身に染みております。ただ幸いながら《狂啗の団》の巡回もありませんし、避難所となる伝道所もあります。対処さえ誤らなければそう恐れることもありません」

すべての村に兵を配置し、守備することは不可能だ。そこで対策として、村々にオルタナ教の伝道所や教会という名の砦を造り、もし魔物の襲撃を受けた際は《狂啗の団》到着まで立て籠もるよう指示している。伝道所や教会という名にしているのは、そうすることでオルタナ教の布教に熱心なヴィエリヒト司教国から建設費用が補助されるからだ。この方法は一応うまく機能しているが、トロールのような強力な魔物が出てくると、とても持ちこたえられないことも分かっている。

魔物の話をしているまさにこのとき、その出来事が起こったのは不運な偶然としか言いようがなかった。

「魔物だ！ 魔物が出たぞ！」

最初、その声が家の外から聞こえても、セシリアたちは咄嗟に反応できなかった。だが鐘を打ち鳴らすカンカンという耳障りな音が村中に鳴り響くと、さすがに状況を把握せざるを得なかった。

「魔物!? 魔物だと!？」

真つ先に反応したのは、護衛のブレイムスだった。

「まさかこのときにか！ セシリアさま、急ぎ避難を！」

「落ち着きなさい、我が国においてはそう珍しいことではないでしょう。村長の方がまだ落ち着いて見えるほどよ？」

「いえ、護衛の方の意見はごもつともです。セシリアさまはこの国になくってはならないお方、急ぎ避難を」

「分かりました。ブレイムス、他の護衛たちも至急伝道所へ」

村は混乱寸前の慌たじさに包まれた。

すべての村民が作業を放り出し、急ぎ村の中央に建てられた伝道所という名の砦へと逃げ込む。村人とセシリアたち一〇〇人ほどが入れる程度の大きさがあり、村で唯一石造り

の建物でもある。一箇所しかない門を閉ざせばまず並の魔物は侵入できず、また砦の中には弓矢や備蓄の食糧と、そして狼煙台があった。

「狼煙をあげよ！ 赤だ！」

村長が命令を出さずとも、すでに狼煙の準備は進められていた。赤い色の狼煙を上げれば、すぐにでも近くにいるはずの《狂噬の団》が援軍に来てくれる。

「ブレイムス、あなたは守備の指揮を」

「お任せください。全員、防壁を上げれ！ 周囲を警戒するんだ」

ブレイムスはもともと《狂噬の団》の傭兵であり、魔物退治の専門家だ。彼がいれば、並の魔物相手に後れをとることはない。

「村長、大変です。三人ほど姿が見えません」

「そうか。外で無事であることを祈ろう」

村長と村人の間でそんな会話がかわされていた。何十人もいれば当然逃げ遅れる者も出る。そして一人二人のために門を開け、全員を危険にさらすことはできない。逃げ遅れた者は外で魔物に見付からぬよう隠れてもらうしかないのだ。

「ですが村長。そのうちの一人がマノンのようなのです」

「なんだと!? マノンが!？」

村長のたった一人の家族の名が告げられ、さすがに動揺を隠せない様子だった。

「村長、急いで探しに行くべきだわ！」

出過ぎたことであると分かっている、セシリアはそう言わずにいられなかった。魔物は子供とて容赦しない。あの可愛らしい子が魔物に食い殺されるところなど想像したくもなかった。

村長がセシリアの提案に心が揺れたのは間違いない。だがややあって、村長は首を横に振った。

「私とてそうしたいのは山々です……！ しかし魔物がウロ付く中、居場所の分からないマノンを探しに行くなど自殺行為でしょう……！」

それは間違いなく正しい判断だった。ブレイムスたち護衛に命じるにしても、せめてマノンの居場所が判明した後でない限り、無駄に危険にさらすだけだ。

「来たぞ、ゴ布林どもだ！ オーガもいる！」

防壁の上で見張りについていたブレイムスが、緊張した声を上げた。

セシリアも急ぎ防壁の上に出る。村を囲む麦畑から次々と姿を現したのは、子供やフェルトフォルクと同じぐらいの背丈をした緑色の魔物だった。

ゴ布林だ。ギャッギャと耳障りな声を上げ、麻のような繊維でできた粗末な衣を身に

まとい、粗末な武器を手している。その小ささから、大人なら一対一でも負けることはないと言われるほど弱い魔物だが、問題はその数だ。「世界が減びてもゴキブリとゴ布林とフェルトフォルクは生き残る」という諺があるほどに繁殖力が強く、常に集団で獲物を襲うという習性がある。このときも例外ではなく、次から次へと麦畑から飛び出してきたゴ布林の数は、数十匹はいるように思えた。

さらに、ゴ布林に続いてオーガが姿を現した。黒ずんだ灰色の皮膚を持ち、骨格は人に似ており、魔物というより亜人とも表現すべきかもしれない。ただし言語を解することとはできず、人よりもかなり知能は劣ると言われている。その代わり人より二回りほど大きな体軀を持ち、ゴ布林のような弱い魔物を引き連れ人の領域を侵犯し、人間を好んで喰らうという。

魔物たちは次々麦畑から出てくると、家の陰に隠れながら遠巻きにこちらの様子をうかがっている。

「こ、この醜い魔物が！ 出て行け！」

防壁の上で弓を構えていた村人が、矢を射掛けた。

「待て、この距離では当たらん、無駄に矢を放つな！ こうして籠もっている限り奴らにはなにもできんのだからな！」

慌ててブレイムスが止める。

魔物ではなく賊や軍の類が襲ってきたのであれば、籠城している間に家々は略奪され、火が放たれていただろう。だが魔物にそんな考えはない。家屋は壊されるかもしれないが、食糧のほとんどは伝道所に保管してある。このまま籠城を続けていけば、魔物はなにもできずに《狂啖の団》に討ち取られることになるはずなのだ。

実際このときも、現れた魔物たちは村人が全員伝道所に籠もっていることに気付くと、歯齧みして遠くから眺めるだけだった。

「ブレイムスさま、確認したところゴブリン数十匹にオーガが数匹程度です。我らが打つて出れば勝てる数かと」

部下の一人がそうブレイムスに報告する。しかしブレイムスは動かなかった。

「焦るな、あれが全てとは限らん。だが他に魔物がおらぬとなれば直ちに打って出て根絶やしにしてやろう。皆、恐れることはない！ 我らには聖女セシリアさまのご加護があるのだからな！」

士気を高めるためか、ブレイムスは盛んに鼓舞を繰り返した。魔物は人の弱気につけ込むと言われている。気を大きく保つのは、魔物との戦いの基本なのだ。

セシリアとしては複雑な心境だった。アレン・ヘム公爵家の娘には代々不思議な力が宿る

と教えられてきた。だがその力が宿るのは二〇歳を過ぎてからと言われており、今のセシリアにはなんの力もない。

（せいぜい毎晩同じ悪夢を見るだけなもの）

しかし自分がいるだけで全員の士気が高まるならと、凍とした態度を崩さないよう虚勢を張り続ける。

そんなとき、遠巻きにこちらを見つめていた魔物たちに動きがあった。なにか別の興味のあるものを見つけたらしく、一斉に動き始めたのだ。

何が起こったのかはすぐに分かった。

「だ、誰か！ 助けてえ！」

「あれは……マノン!?」

村長が叫んだ。逃げ遅れていた村長のたった一人の孫娘が、ゴブリンに追われて麦畑から飛び出してきたのだ。

人々の視線が村長に集中する。村長は孫娘を助けるために門を開ける気ではないのか。一〇歳の女の子が魔物に喰われるのを黙って見ていられるわけがない、それも仕方ないかもしれない。だがそのせいで他の村人すべてを危機にさらすことができるのか――。

様々な思考が伝道所の中を交錯した。

(助けに行くべきなの……!?)

セシリアもまた逡巡していた。なにもブレードスたちに魔物の中へ突っ込めど命令する必要はない。

(わたしが死ぬとしても、今日じゃないはずだから!)

そんな確信が、セシリアにはあった。このところ毎晩見る悪夢がそれを裏付けているのだ。だが、護衛がいなければなにもできない自分に、マノンを手助けすることができるのかは分からない。

一方セシリアとは違い、村長が行動に出るまでは一瞬だった。

「申し訳ありません、聖女さま。他の者を危険にさらすわけにはまいりません、後のことはお任せいたします」

セシリアが「どういうこと？」と問い返す間もなかった。

防壁の高さは二階程度だし、斜面の傾斜もそう急ではない。村長は躊躇なく防壁から飛び出した。そして滑るようにして防壁を下りると、まっすぐマノンの元へ駆け寄っていく。

「そんな、無茶よ!」

たった一人でマノンを手助け、戻ってこられる状況ではないのだ。

だが、飛び出した村長を制止する術はなかった。村長はマノンの元まで一直線に走り寄

ると、一度だけ強く抱きしめた。そして自分の後方——伝道所の方に向かって、孫娘の体を突き出した。

「逃げなさい、早く!」

有無を言わさない強い口調だった。

このときマノンが、たった一人の家族である祖父がなにをする気なのか理解したのかは分からなかった。ただ強い口調で逃げろと命じる祖父に逆らえなかったのか、あるいは襲ってくる魔物が怖かったのか。結果として、マノンは間違いない祖父がもっとも求めているであろう行動に出た。伝道所に向かって逃げたのだ。

「こっちだ、魔物どもめ!」

村長はたった一人でゴブリンの群れに立ちはだかった。時間を稼ぐつもりなのだ。どこからか持ち出したナイフを振り回し、ゴブリンに斬りつける。

大の大人が命がけで戦えば、ゴブリンは怖い相手ではない。だが一匹二匹ならともかく、五匹十匹と敵に回せば勝ち目は薄い。ゴブリンたちは少々の犠牲を無視して村長の体に群がり、汚い刃や歯を突き立てていった。

村長は痛みに悲鳴一つあげなかった。そのせいか、背を向けて逃げていたマノンが足を止めることも、振り返って祖父の最期を見ることもなかった。

しかし村長の犠牲も、わずかな時間を稼げたに過ぎない。数十匹の魔物たちが、老人一人分の肉で満たされるわけもないのだ。魔物は子供の肉を好むという真偽不明のウワサもある。村長の肉にあずかれなかった他のゴブリンたちは、マノンを一斉に追い駆け始めた。明らかにマノンよりゴブリンの方が足が速い。セシリアは今度こそ決断した。

さっきは躊躇したがゆえに村長は死んだ。マノンのたつた一人の家族はゴブリンに滅多刺しにされたのだ。もう二度と躊躇はすべきではない。

「ブレイムス。わたしがこれからなにをするか分かる？」

「お心のままに。魔物の数があれだけならば、我らにも勝機があります。聖女さまのご加護を信じましょう」

忠実な老騎士は、もはや止めようとはしなかった。

セシリアは護衛たちを振り返り、告げる。

「みんな、よく聞きなさい。今あの子を助けにいけば、わたしたちの誰かは無駄に命を落とすかもしれません。それでも戦える武器があるのに目の前の少女一人救えなくては一生後悔するでしょう。命令します。わたしに続きなさい、あの子を助けに行きます！」

防壁の上から身を躍らせる。

「全員聞いたな!? 我らには《アレンヘムの聖女》のご加護がある！ 全員、セシリアさ

まに続け！」

ブレイムスたちの抜剣する金属音が次々響き、セシリアに続いて防壁を滑り降りる。

「さあマノン、こっちよ！」

セシリアはまず逃げてくるマノンに駆け寄ると、全身の力を振り絞って抱え上げ、伝道所に向かって走り出した。一七歳のセシリアにとっては重労働だったが、命が懸かっているとせば多少の無理はできた。

「セシリアさまはその子を安全な場所へ！ この場は我らが！」

ブレイムスの提案はありがたかった。

「分かったわ！ わたしのごは神の恩寵がある、気にせず戦いなさい！」

ブレイムスたちとすれ違ふ。

マノンを抱える自分が彼らの足手まといに過ぎないことは分かる。彼らが存分に戦えるよう、なんとか伝道所へ戻るべきだった。幸い、村人たちも領主の娘と村長が命がけで守ったマノンを見捨てる気にはなれなかったのだらう、門を開け始めてくれた。

だが、ゴブリンはともかく、オーガにはそれなりの知能がある。そのせい、魔物は予想外の動きを見せた。

「……先回りされた!?」

「一匹のオーガがセシリアと伝道所の間に割って入ってきたのだ。伝道所へ駆け込むことは諦め、別の方向へ逃げざるを得なかった。」

しかしマノンを抱えたままオーガの足から逃げることは不可能だった。背後からオーガが近づくを感じる。嫌な匂いが鼻をついた。オーガの体臭だ。

危険を感じて思わず振り返ると、オーガが粗末だが大きな斧を振り上げているが見えた。

「ひっ」と腕の中でマノンが怯える。

セシリアはオーガを睨みつけながらマノンを全身で庇った。気丈に振る舞おうとするも、醜悪なオーガの顔と、振り上げられた大きな斧を見せつけられると恐怖で顔が引きつりそうになる。

様々な思いが走馬灯のように交錯した。あの斧を振り下ろされれば自分は死ぬだろう。自分には神の恩寵があるから今日死なない——などというのはただの思い込み過ぎない。もしここで死ぬのが本当の運命だったら？ 斧を叩きつけられるのがどれほど痛いかは想像したくもなかったし、父より先に死ぬのは申し訳なかったし、マノンを守れなかったら村長に合わせる顔もない。

だが果たして、セシリアの懸念は杞憂に終わることになる。

「危ない、伏せろ！」

若い男の声がした。それが誰の声かなど知る由もない。ただ反射的に、マノンを抱えて頭を低くする。

オーガの小汚い斧がセシリアに振り下ろされることはなかった。どこからともなく飛び出してきた若い男が、自身の剣で斧を受け止めてくれていたのだ。

しかし若い男はオーガに比べればはるかに小柄だ。とても斧を止められるようには見えない。

そのときだった。飛んできた一本の矢が、オーガの左目を貫いた。こればかりはオーガもたまたま顔を押しさえて絶叫する。

(今の矢は、東から飛んできた……?)

つまりブレイムスタチからでも、伝道所からでもない。東は《呪われた地》、すなわち魔物たちがやってくる方向だ。

思わずそちらの方を見ると、武装した若い男が駆け寄ってくる。その後ろには二〇人ほどの武装した集団が見えた。

「あれは《狂噬の団》!? 援軍が来てくれたの!?」

それにしても早過ぎる。恐らく国境線を巡回していた部隊の一つがたまたま近くにいたのだろう。

(やっぱり今日私は死ななかつた。夢の通りだわ)
ようやくその確信が抱けたことにセシリアは心底安堵しながら、自身の命を救ってくれた若い男を見つめていた。

続きは、4月20日発売のファンタジア文庫で！

©Toru Shiwasu, Aco Arisaka 2018